

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25862139

研究課題名(和文) 終末期がん患者と配偶者の相互作用を支える看護モデルの精練

研究課題名(英文) To refine the nursing model to support the interaction between terminal cancer patients and their spouses.

研究代表者

渡邊 美和 (watanabe, miwa)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：90554600

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、終末期がん患者と配偶者の相互作用を支える看護モデルを、実践で活用可能なものにするために精練することである。文献検討にてこのモデルのうち「終末期の話し合いを支える」こと「家族への看護介入」という部分に焦点をあて看護モデルを発展させた。そして、看護モデルを実践するためのツールとして、「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実践マニュアル」と「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブック」を作成した。これらのマニュアルとガイドブックの問題点を明らかにするために、エキスパート看護師を対象にしてインタビュー調査を実施した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to refine the nursing model to support the interaction between terminal cancer patients and their spouses. After literature review, I focused on “to support end-of-life-discussion (EOLD)” and “to intervention in families of terminal cancer patients” to develop the nursing model. Further, I made a manual of nursing to support EOLD between terminal cancer patients and their families and a booklet for families to support EOLD”. And I interviewed some nurses who are expert at nursing terminal cancer patient and their family to clarify the problem of the manual and the booklet.

研究分野：看護学

キーワード：終末期 がん患者 家族 相互作用 話し合い

1. 研究開始当初の背景

年々がんによる死亡者数は増加しており、昭和 56 年以来がんはわが国の死因順位の第一位である¹⁾。終末期のがん患者と家族は、患者の病状や死にゆくことでの様々な苦悩を体験する²⁾³⁾。患者の入院や死にゆくことは、患者が仕事を失うことでの収入の減少、医療費による支出の増加、患者が家事をできないことによる役割の変更など、家庭の経済面や役割面にも大きな変化をもたらし、患者も配偶者もそれにとまなう負担や苦悩を抱えていることが明らかになっている⁴⁾⁵⁾。終末期の患者と家族は、死を受容していく過程において、感情や言動が日々変化し得ることが明らかにされている⁶⁾⁷⁾。患者と配偶者のそれぞれの病気や死の受けとめ、医療や日々の生活に対する考え方、相手への思いはゆれうごき、その時々両者の相互作用は、互いに支えあい安寧を得られるような前向きなものだけではないと考えられる。患者と配偶者の相互作用の有り様は、それぞれの心理状態や生活の質に大きく影響すると考えられ、また家族としての様々な問題に対処するために重要であるといえる⁸⁾が、捉えにくいものである。既存の研究では、両者が寄り添い安寧を得るような前向きな相互作用や、思いを伝えあうことができず患者の QOL に支障をきたすなどの消極的な相互作用もあることが報告されている⁹⁾¹⁰⁾。終末期患者の身体的苦痛は医療者の介入により緩和できる部分が大いかもしれないが、心理社会的苦痛の緩和には家族の果たせる役割が大きく、必要不可欠であると言える。したがって、両者が安寧に過ごし、互いにより影響を及ぼし合うような関係を保つことで患者の苦痛の緩和につながり、両者の相互作用を支える看護援助が重要であるといえる。研究者は、先行研究にて、終末期がん患者と配偶者の相互作用を明らかにし¹¹⁾両者を支える看護モデルを考案した。本研究では、その看護モデルを実践で活用できるよう精練することを目的とする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、終末期がん患者と配偶者の相互作用を支える看護モデルを精練することである。

3. 研究の方法

終末期がん患者と家族に関する文献検討により、終末期がん患者と配偶者の相互作用を支える看護モデルの内容のうち、今回は特

に「終末期の話し合いを支える」こと「家族への看護介入」という部分に焦点をあて看護モデルを発展させることとした。

(1) 終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いに関する問題を理解するための文献検討

一次論文の選択基準

終末期がん患者と家族に関連する質的研究で、結果の記述の中に「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いに関する問題」についての記述が含まれている論文とする。

一次論文の検索方法

和文献は、データベース医学中央雑誌を用いて、キーワードに「終末期」「家族」「相互作用」「話し合い」「アドバンスケアプランニング」「エンドオブライフディスカッション」「EOLD」「意思決定」を設定し、2008～2017年で検索し、入手可能な文献から選出した。英文献は、データベース MEDLINE を用いて、キーワードに「End of Life Discussion (EOLD)」「Advance Care Planning (ACP)」「terminal」「cancer」「family」「conversation」「discussion」「barrier」「problem」を設定し、2008～2017年で検索し、入手可能な文献から選出した。

分析手順

- ・一次論文を精読し、内容を十分に理解する。
- ・それぞれの論文の結果の記述の中から、「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いに関する問題」を表わすテーマ、カテゴリー、下位カテゴリーなどを抜き出し、コードとする。そのままの表現では「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いに関する問題」として意味がとらえにくい場合には、その結果について説明した記述部分をよく読み、意味が捉えられる表現で記述しなおす。
- ・意味の類似したコードを集めて簡潔な一文で表現し、カテゴリーとする。
- ・カテゴリーを、sidani¹²⁾の示す問題の枠組みを参考に「発現」「要因」「結果」に分類する。

(2)「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実践マニュアル」と「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブック」の問題点を明らかにする

ためのインタビュー調査

対象

終末期がん患者と家族への看護実践に関するエキスパートの看護師とする。終末期がん患者と家族への看護の経験が5年以上ある看護師、がん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師など、10名程度を対象とする。

調査内容

【対象者の基本情報】

- ・看護師経験年数
- ・所属機関 / 部署
- ・職位
- ・看護専門資格の有無、種類

【看護実践マニュアルについて】

- ・表現のわかりにくい部分とその理由、改善策
- ・実施する際に困りそうなこと、問題となりそうなこと
- ・文字の大きさや見やすさについて改善の必要な部分と理由、改善策
- ・追加したほうがよいと思う内容と理由

【家族向けのガイドブックについて】

- ・表現のわかりにくい部分とその理由、改善策
- ・家族が不快に感じる可能性がある部分とその理由、改善策
- ・文字の大きさや見やすさ、印象について改善の必要な部分と理由、改善策
- ・追加したほうがよいと思う内容と理由

調査方法

面接調査法により調査を行う。

承諾の得られた対象者に対して、看護実践マニュアルと家族向けのガイドブック、インタビューで聞きたい内容を面接前に渡し、読んでおいてもらう。個別、またはグループでの半構造化面接を行う。面接は各対象者に1回ずつ、個別面接では30分程度、グループ面接では1時間程度で行う。面接を行う日時と場所は、対象者の希望に合わせて設定する。面接内容は、対象者の許可を得て、ICレコーダーにて録音し、逐語録を作成する。

分析方法

- ・逐語録を精読し、「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実践マニュアルについての問題点」と「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブックについての問題点」それぞれ、関連

する記述をそのまま抜き出す。

- ・抜きだした記述を簡潔な一文で表現する。
- ・「簡潔な一文」を、類似したものをどうして集め、共通した内容を表現しカテゴリーとする。

4. 研究成果

(1) 終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いに関する問題を理解するための文献検討の結果

対象文献

対象となった文献は、和文献8件、英文献7件であった。

終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いに関する問題

sidani¹²⁾の示す問題をとらえるための枠組みを参考に「発現」「要因」「結果」で示す。

【発現】

- ・患者と家族は互いに死を意識した会話をしない
- ・患者は終末期の話し合いを試みようとするが家族はそれに応じない
- ・家族は終末期の話し合いを試みようとするが患者はそれに応じない
- ・話し合いのなかで患者の意向とは違う家族の意向を押し付ける

【要因】

- ・患者の死が近づいていることについて家族の認識が不足している
- ・家族は、患者の死が近づいていることを認めたくない気持ち強い
- ・家族は、死を意識した患者との会話は、患者に悪影響を及ぼすと信じている
- ・終末期の話し合いを持つための環境が整っていない
- ・終末期の話し合いを始めるタイミングが悪い
- ・終末期の話し合いをもつことに対する、患者、家族の理解力が低い
- ・文化や宗教的背景が終末期の話し合いを抑制する
- ・患者は死を意識した話し合いを苦痛に感じる
- ・患者は死を意識した話し合いを先延ばしにしたいと思う

【結果】

- ・終末期の話し合いを持ってないと患者の心理

的負担となる

- ・家族は患者の思いや希望がわからず困難を感じる
- ・終末期の話し合いを持ってないことが患者の死後、家族にとっての後悔となる

得られた結果より、看護モデルを発展させ、実践につなげるためのツールとして、「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実践マニュアル」と「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブック」を作成した。

(2)「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実践マニュアル」と「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブック」の問題点を明らかにするためのインタビュー調査の結果

対象者の概要

対象者は3名であり、看護師経験年数は平均23.3年(20年~28年)、終末期がん患者と家族への看護経験年数は平均19.3年(15年~23年)、2名はがん看護専門看護師の資格を有していた。

終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実践マニュアルについての問題点

看護実践マニュアルの問題点として、「文章が長く続いていて読みにくい」「初回の面談を始めるきっかけづくりに関する情報が足りない」「どのような場で実践できるかが不明確である」「看護師への動機づけが足りない」「経験年数の浅い看護師では実践が困難と考えられる」などの問題点が挙げられた。

終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブックについての問題点

家族向けのガイドブックの問題点として、「文字が小さくて読みにくい」「話し合うための内容が抽象的でイメージしにくい」「相談できる医療者が具体的に示されていない」などの問題点が挙げられた。

今後も看護師へのインタビュー調査を継続し、分析を進め、得られた結果を基にして、「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護実

践マニュアル」と「終末期がん患者と家族の間での終末期の話し合いのための家族向けのガイドブック」をより実践可能な内容となるよう精練し、このツールを用いての介入研究に発展させていく予定である。

【引用文献】

- 1) 国民衛生の動向,58(9), 2011/2012
- 2) Gunilla Appelin, Carina Bertero: Patients' Experience of a Care in the Home A Phenomenological Study of a Swedish Sample, Cancer Nursing, 27(1): 65 - 70, 2004
- 3) Hans Gunnarsson, Joakim Ohlen: Spouses' grief before the patient's death: Retrospective experiences related to palliative home care in urban Sweden. Mortality, 11(4): 336 - 351, 2006
- 4) 本間美恵子: がん患者・家族が抱える社会的問題 - 一般病棟へ入院中のがん患者・家族の調査結果から, 日本がん看護学会誌, 13(2): 11 - 13, 1999
- 5) 伊藤美也子: がん患者の療養における配偶者の情緒体験と悲嘆作業, 日本赤十字看護大学紀要, 11: 68 - 74, 1997
- 6) E.キューブラー・ロス著, 川口正吉訳: 死ぬ瞬間 死にゆく人々との対話, 読売新聞社, 66 - 169, 1971
- 7) 本田彰子, 佐藤禮子: 終末期がん患者の家族の移行 - 家族の移行プロセスと看護介入 -, 千葉看護学会誌, 5(1): 16 - 22, 1999
- 8) 渡辺裕子, 鈴木和子, 佐藤禮子, 井上智子, 佐藤まゆみ, 小澤桂子, 水野照美: 終末期にある家族成員を含む家族の変化と家族対処, 千葉大学看護学部紀要: 17, 21 - 30, 1995
- 9) 吉田裕子: 終末期がん患者にとっての周囲の人々とのつながりに関する研究, 平成15年度千葉大学大学院看護学研究科修士論文
- 10) Anthony J.Greisinger, Ronald J.Lorimor, Lu Ann Aday, Rodger J.winn, Walter F.Baile: Terminally Ill Cancer Patients: Their Most Important Concerns, Cancer Practice, 5(3): 147 - 154, 1997
- 11) 渡邊美和, 佐藤まゆみ, 眞嶋朋子: 終末期がん患者と配偶者の相互作用に関する研究. 千葉看護学会誌, 20(2): 31-39, 2015
- 12) Souraya Sidani, Carrie Jo Braden: Design, Evaluation, and Translation of Nursing Interventions. WILEY-BLACKWELL, 2011.

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

渡邊 美和 (WATANABE, MIWA)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：90554600